

## ピアノと校歌

上越市北城町 松川 ケイ子(直江津市四ツ屋区出身)

上越に戻って、早や六年になろうと  
しています。

私の生まれは直江津で、昭和二十八年の直江津小学校の卒業生です。しかし中学、高校は高田へ汽車通学していましたが、直江津の思い出は小学校卒業までで途切れています。それなのに不思議と高田より直江津が懐かしい。

高田の中学に入ったとき、一人称をぼく・わたし、二人称はあんたで会話している多数派の高田っ子に圧倒されました。浜っ子は、女の子も「おら」「おまん」と言っていました。しかも当時の中学の校則には、「標準語を使いましょー」という項目があったのですから。もっとも子どもは高田風になじむのも早い。直江津の二級友、近所の遊

び友達とはそのまま縁遠くなりほとんど思い出す事もないまま、長い長い年月が過ぎてしまいました。

そんな中でふるさとリターンでしたが、いままで一度も開かれたことのない小学校の同級会開催の話が持ち上がり、幹事を引き受けたのです。

古稀近い三年前、実に五十五年振りの邂逅でした。宴会の翌朝、新築間もない校舎を訪ね、ピアノの世界三大名器と称される「ベヒシュタイン」ピアノにも会ってきました。黒い布カバーをめくると現れたグランドピアノ。いまだきのピアノより小ぶりに感じられました。そっと校歌を弾いて友達と歌ってみました。なんとも、あたたかくやわらかい音が、新校舎の木造集会所に響きました。

このピアノは、昭和三年に同窓会から寄贈され、激動の時代をぐりぬけ、一時、郷土室に葬りかけられていたのを、平成六年、元教頭の下村省一先生が発掘し、ホテルセンチュリーイカヤの当時社長の姉にあたる石塚よね子さんが修理費を出して、修復が実現したのです。同級会へ向けての準備中に、下村先生から詳しい資料を添えて教えていただいたときは、本当に興奮しました。

「米六十キロが六十十円の時代に直江津の人達が子供たちのために資金を集め、破格ともいえる三千三百円の高級ピアノを贈った。そこには浜っ子の気つぷと心意気、港町・臨海工業都市としての直江津の歴史、そして何よりも、地域で子供を育てる」という地域教育の原点がある。」(上越タイムス「上越の遺産」・2011年6月付紙より)

私たちは、当時、そんなことはつゆ知らず、無邪気にそのピアノで校歌を歌っていました。ジェームス・ダンが作曲した曲です。直江津に明治三十三年に、東洋一と言われた石油精製工場を興したアメリカ人、エドウィン・ダンの二男で、直江津小学校の先輩であり、後に日本に帰化した音楽家です。外国人の作曲の校歌なんて他にあるで

しょうか。リストも絶賛したという世界的名器ベヒシュタインピアノを選定したのも彼です。詞の方も素晴らしく、元校長で、「慈父」と敬愛された上原慶三が書きました。普遍的な人間の真実を平易な言葉で綴り、今も何の違和感も無く歌い継がれているのです。

「ながめ尊き妙高山の、窓に映れる姿を仰ぎ……」で始まり「この庭懐かし、この庭菜し」で終わります。

在校当時、各学年六クラスもあつた直江津小も、今は全校でもわずか一六三人(昨年五月末現在)だそうです。つい先には一〇〇年目にして直江津高校が閉校しました。

「この先何時、統合されるかわからない、無くなってしまうようにしっかりと歌い継いでください。同級会では何回でも歌って下さい。名曲です。」と下村先生は言われました。

直江津小のピアノと校歌は、そこに込められた地域の人々の熱い思いと



松川ケイ子さん

もに大切に守っていききたい「宝」です。

ここ数年、子供・父母、地域の人を集め、学校で、一流奏者を招いてのベヒシュタインを囲むコンサートが行われていると聞いています。

もちろん私達も今年の同級会には、またみんなで声高らかに、「ながめとうとおきき」と歌いますとも！！

### 【写真説明】

ベヒシュタインピアノが左に半分写っている「音楽クラブ」メンバーの写真。

五八年前の直小音楽室の風景です。

(マンドリンを持つ前列左から三人目が私)

卒業近い昭和二十七年暮れの頃、音楽の教科書の見開き用に写すという事で動員されました。



## 「ベヒシュタイン」について

(ウイキペディアより抜粋)

ベヒシュタインは、スタインウェイ、ペーゼンドルファーと並んで、世界三大ピアノメーカーに数えられるドイツのピアノ製造会社である。

一八五三年、カール・ベヒシュタインによってベルリンで創業。「ピアノのストラディバリウス」と呼ばれるほどの名器で、第二次世界大戦前の日本においては最高のピアノの代名詞であった。ベヒシュタインについてランツツ、リストは「二十八年間貴社のピアノを弾き続けてきたが、ベヒシュタインはいつでも最高の楽器だった」、クロード・ドビュッシーは「ピアノ音楽はベヒシュタインのためだけに書かれるべきだ」と言う言葉を残している。また、セシル・テイラー、チック・コリアなどジャズピアノリストにも度々使用され、クラシック界に留まらず、その演奏性は高く評価されている。

しかし、一九二九年、世界恐慌で打撃を受け、さらに第二次世界大戦で工場が破壊されるなどしたため、一九六二年、アメリカのボールドウィン社の傘下に入ったものの、一九八六年にドイツのピアノ製造マイスターであるカール・シュルツェが経営権を買取り、念願であったドイツ人の手に経営権が戻された。その後は資本増強を積極的に行い、一九九七年には株式会社となり、資本増強と東西ドイツ統一と共に、ツインマンとホフマンのブランドを傘下に収め、ベヒシュタイングループを設立。現在に至っている。